

# らえるらえる

Well Well

第5号



## 二〇〇三年年頭のご挨拶

坂井瑠実

坂井瑠実クリニック院長

昨年末はとても悲しいことがありました。世界情勢は平和とはとても遠い方向に向かい、政治は不透明、景気の低迷を肌で実感せざるを得ない昨今、医療を取り巻く環境も益々厳しくなることが予測される二〇〇三年の幕明けです。昨年、厚生労働省の先輩の年賀状に「小泉首相の聖域なき構造改革は透析の分野にはとても厳しい」と書いてありましたが、これほどひどい医療改悪がなされるとは思ってもいませんでした。これで最後というわけではなく、エリスロボエチンをはじめとする透析の患者さんに不可欠な薬剤も「まるめ」になるとか七五才以上は定額制にするなど想像を超えるさらなる改悪論が取りざたされています。いろいろ考えると暗い気持ちになってしまいました。しかし坂井瑠実クリニックは「質を下げない透析」を担保するのではなく「より良い透析」を工夫する事を今年の課題にして、何が一番大切かを見誤らないように十分考え行動したいと思っています。

透析室は曜日変更もままならなくなってきて皆様にご迷惑をおかけしています。どこかにサテライトをつくらなくては…とか、とても在宅では生活が難しい方々が多くなっていますので、透析患者さんの入れる老健施設を…とか考えることがいっぱい頭がパンクしそうです。いっしょに考えて下さい。お世話になってるNPO法人ジャスミンもボランティア募集で苦勞をしているようです。誰かのために何か出来ることを探そうではありませんか。誰かのためにほんのちよつと何かが出来れば多分自分も幸せになると思います。この二月には友愛会の計画でハワイ旅行の予定です。第一回目ですので私と松本、前田両看護師長（婦長でなくて師長と呼ぶようになっていす）小西副主任が病院から参加、あわせてハワイの透析を勉強して来るつもりです。この夏ハワイから旅行で来られたミセスフナヤマも来てくれるそうです。楽しい交流が出来る事と楽しみにしています。また参加者がこの紙面で珍道中を報告してくれるでしょう。

きっと大変な年の幕開けなのでしょうが、本物の医療を追求しながら、坂井瑠実クリニックの周辺はみんな元気で楽しく過ごしていきたいと思っています。透析医療は自己管理が命、合併症を克服して、いっしょに「良い透析」づくりをして下さい。患者さんが元気で、スタッフが元気なのが透析施設の評価なのです。今年もどうぞよろしくお願いたします。



内科 新光 毅

新年おめでとうございませう。今年に開設五年目、次の飛躍の基礎を固めるとともに、坂井瑠実クリニックらしき、独自性を確立する為に、一致協力したより一段の努力が求められる年だと思ひます。

さて、堅い話はこゝ迄として、ごく普通の挨拶である「新年おめでとう」、についてあらたまって「なにがめでたのか」と考えられたことはあまりないだろうと思ひます。

少し(?)昔の話ですが、私がまだ駆け出しの医者頃、塩屋に隠棲しておられた京都大学名誉教授辻寛治先生のお宅に週一回往診に参上していた事がありました。

なにしろ内科の大先輩、聴診器のあて方一つにも氣を使う緊張の連続でした。

幸い、症状少し安定して年を越され、新年早々にお伺ひした時、まずお年賀を申し上げ、手順通り診察を進め、終つて脈拍・血圧・聴、打診等の結果を御報告「そう、まずまずですね、御苦労様」と御言葉を頂きホットした瞬間「おめでたいとはどういう意味ですか」とお訊ねがありました。

突嗟の事に頭は眞白、言葉につまづいて、「色々な事があった二年も過ぎてみればこれ迄と変わらずお正月がやつて来る。有為転変の中での不動点、変わらぬものに又逢えた、ああよかった」という安堵の氣持がめでたいのですよ」と言われ、鳩が豆鉄砲を食つた様にキョトンとしている私の様子が余程おかしかつたのか、お笑ひになりながら当時私の研究テーマであつた成長ホルモン作用を例に、変化の中の不変性を少しわかりやすくお話し下さいました。

何かとても大事な事をお教え頂いたとは思ひながらも若氣の至り深く考えることもせず、重ねてお訊ねする機会も無いまま、先生はお亡くなりになつてしまわれました。

うかうかと日を過し、齢だけは近づいたものもとより先生の境地には及びもつきませんが、恐らく死期を察しておられた先生が敢て「めでたい」を「安堵」で説明されたのには、御自分の人生に対する自信もさる事ながら、更に深い洞察があつたの事ではなかつたのかとの思ひが年如に強くなつて、います。

閑話休題、老人の事はさておき、若い皆様は御自身で感じておられる通り、古い日々が去り、新しい日々が蘇る喜びとして新年の目出たさがあるのが自然だと思ひます。

古代エジプト人がナイル河の定期的氾濫とシリウス星の位置の關係から1年を三六五日とする太陽暦を定めたとき、これを、

そのグレゴリウス暦に基づく西暦二〇〇三年、平成十五年が皆様にとって充実した二年であり、願ひてよくやつたと次の二〇〇四年、平成十六年の新春を目出たく迎えられる成果の得られる一年であります様、御健勝と御活躍に大いに御期待申し上げて新年の御挨拶いたします。

去年の暮れに私達の大切な仲間であつた近藤さんが亡くなされました。この原稿を書いていても彼のことが偲ばれてなりません、彼への思ひはこのうえるうえるにたくさん寄せられ、また皆さんの心の中に生き続けていくことと思われ、多くを語ることは差し控えていただきます。私にできることは、ただ彼の意思を引き継ぎ、最善の医療を持つて皆さんの健康を見守ることにより、坂井瑠実クリニックを皆さんとともに発展させていくことだと思ひます。

世の中は暗い話が多く、透析医療にも暗雲が立ち込めて、悲しんでばかりはいられません。悲しんでばかりいると近藤さんに怒られそうです。そうです、悲しんでばかりはいられませんが、皆さんのお力添えを受け、院長共々、スタッフとともに新しい年を良い年にするよう全力を尽くします。

明けましておめでとうございませう。

昨年は四月に診療報酬の引き下げが行われ、医療機関にとって非常に厳しい年でした。特に透析医療に関しては打撃が大きいと言われていただけに、当院長が大会長を務めて、第十三回日本サイコネフロジー研究会を盛況裏に終えることが出来たことは職員に大きな自信を与えてくれました。しかしあの時元氣に意見を述べてくれた近藤部長を年末になくしたことは本当に残念でなりません。

十月の老人保険の改定では急激な負担額に困惑される患者さんに、窓口職員が恐縮しながら対応に追われています。この春又健保本人の三割負担が実施されれば一層の悲鳴が聞こえてきそうです。いい医療を行つてさえずれば報いられるといった信念が揺らいできそうな時代となりました。

坂井瑠実クリニックならではの特色を生かした透析医療、小さい医院ながらきらりと光る良質な医療を提供し続けるにはどうすればよいか、又この不況の中、職員の生活の向上を図る為にはどのような運営をしていったらよいか、断固たる決断を迫られています。小さな医院でこそ出来る利点を生かして、改善できるところは改善し、智恵を絞つてこの難関を切り抜けて行きたいと思ひます。

今年もよろしくお願ひいたします。



副院長 喜田 智幸



事務長 三上 珠実

新年明けましておめでとございます。会員の皆様には楽しい新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

坂井瑠実クリニックも昨年四周年を迎え開院時お腹にいた息子が大きくなったのを見ると、月日は早いものだと感じます。

私がこのクリニックで働き始めたきっかけは泌尿器科の仕事を手を休んでいた時「家に居るんだらたらちよと勉強しに来たら」と坂井院長に声をかけていただいた事でした。

昨年4月からは常勤医となり病院になじんできたかなと感じる今頃です。

私のがんびり過ごしている間に、日本はデフレの時代、医療事情もずいぶん厳しいものとなりました。時代を見極め、素晴らしい、医療提供を目差す坂井瑠実クリニックの一員として今年も頑張りたいと思います。



泌尿器科 三上 満妃



産婦長 久保 君代

新年明けましておめでとございます。機関誌「うえるうえる」も創刊1年が経過し、新しいトピックスも次々と紹介され、「瑠実ちゃんのおかげ」も益々花が咲き……医療法人認可も一周年が経過し友愛会の皆様とともに頑張っている事は二重三重の喜びとしてお祝い申し上げます。

昨年は「診療報酬のマイナズ改定」特に透析分野においては大きな打撃を受ける事になり、当クリニックはもちろん透析医療にかかわっている多くの団体及び個人は非常に不安定な一年であったかと思えます。当クリニックにおいても、患者さん、スタッフ共に影響はありましたが、皆様のご協力と坂井瑠実パワーでなんとか乗り越えようとしています。

看護界においても「保健婦、助産婦、看護婦法」を一部改定し、昨年三月一日より男女の性別で異なっていた看護職の名称が「保健師、助産師、看護師」に統一されました。看護婦の「婦」は女性の持つ柔らかなさという印象から、「師」に変わる事によって更にその柔らかなさの上に専門職としての活躍を期待すると言うことの様です。そして昨年から腎不全看護分野においても、認定看護師の認定の実現に向けて具体的に動き出しております。

本年も坂井瑠実パワーはとどまる事無く新しい夢に向かって走り続けていきましょう、私たちがそれぞれの役割を發揮して安心と希望のある日々を過ごしましょう。

# 瑠実ちゃんのぼやき!

坂井瑠実



## 幻の透析センター

もう二年前にもなろうか、友人がある話を持ってきた。芦屋奥池に某会社所有の研修センターがあり、極秘裏に売却したいというものだった。もちろんクリニックを始めたばかり、借金返済で一杯の私には、買える可能性などゼロ、ただし決済は平成十五年末でよいと言うこの物件、少しは望みありかと野次馬根性まるだして（昔から奥池は私の憧れの地であった）「見るだけならただ!？」とばかりに厚かましく見に出かけたのである。JR芦屋駅から車で十五分、芦有道路に入ってすぐ右折したところに位置する敷地一万坪、国立公園内のこの研修センターは私の想像をはるかに越えて素晴らしく、まさにまさに「ひとめ惚れ」通うこと十数回、満開の桜、目にしみる新緑、真夏の太陽のまぶしさ、池に映える紅葉、ちらつく雪のどの季節のどんな時でも新たな感動があり心を踊らせ、心を和ませてくれた。五十室ある宿泊棟は少し手を加えるだけでそのまま通院困難な透析患者さんの居室となるし、広い会議室を透析室に変身させるのは簡単!池の周りに遊歩道をめぐらせて……eicわくわくと楽しく、次々と夢が膨らんでいた。ね!素晴らしいでしょ!事務長???喜田先生???近藤部長???患者会の○○さん???なぜか誰もいい、とはいってこない。透析を置くには不便、寂しい、この山道では……そして今、この環境の素晴らしさを理解してくれないみんなに、そして冷たい銀行に腹を立て、打ち出の小槌があればすごい透析センターが出来るのに……となおあきらめきれないでいる。突然芦屋の保険所内にある許認可の出先機関の担当官から電話で、にべつもなく「市街地調整区域には老人ホームは出来ません」のお言葉。ほんとにほんと?!かくして坂井瑠実の夢の透析センターは幻の透析センターと相成ったのである。



【長いまえおき】

坂井瑠実先生は、昭和五十四年三月より住吉川病院の院長をされていました。私は、昭和五十五年から隈病院で甲状腺の手術に取り組んでいました。ある日、坂井先生より電話がありました。「どうしたら副甲状腺がとれるか?」と。私は大変驚きました。なぜなら甲状腺の手術とは、病巣のある甲状腺を切除して、いかにして副甲状腺を保存するのがポイントだからです。今までと逆のことをする。副甲状腺だけを切除するとは。何回かのやりとりのあと、私にとっても隈病院にとっても、初めてのHD患者さんの手術が行われました。大変元気になることでした。名譽ある第一号患者さんは、現在も元気に当院に通院中のOさんです。以来年々とHD患者さんの手術は増えつつあり、ついに私は手術の主体が甲状腺から副甲状腺に移りました。

【PTXとは】

副甲状腺を摘出することをPTXと言います。

【どうしたらPTXが必要か?】

自覚症状で皮膚の?痒感、いがいとした感じが強い時、関節痛がある。特に動かし始めに痛い。

【検査でどの値を見たらよいか?】

副甲状腺ホルモン (PTH) を指標にします。特にインタクトPTHが500以上は要注意です。また透析前のCaとPの積が70以上も気になります。

【どうしたら手術がさけられるか?】

今のところ特効的な手立てはありません。ただリンの少ない食事にして、血中Pを上げないことは重要です。

【PTX手術について】

残念ながらもし手術が必要と診断されたら・・・心配は要りません。全身麻酔下で、痛いこともなく、輸血は不要で手術の傷跡も目立ちません。

【おわりに】

平成十年十月十日の開院式から早いもので四年が経ちました。はじめは木下先生、後に喜田先生に手伝いをしていただきながら、数えてみると二二〇人の患者さんの手術をさせていただきました。そのほとんどが透析患者さんです。透析施設も五十七ヶ所に及びました。ホテルやレストランで三つ星(☆☆☆)四つ星(☆☆☆☆)などというランク付けがあります。多くの施設の患者さんと接し、四つ星(☆☆☆☆)の施設に通院中の皆様の御健勝を心からお祈りいたします。



小林診療所 小林 彰

### 腎性副甲状腺機能亢進症の手術

## 兵庫県透析施設対抗 バレーボール大会 出場



兵庫県透析施設対抗バレーボール大会というのがあり、当クリニックも「目指せ1勝!!」を合言葉に去年から出場しています。残念ながら今年は勝利の余韻に浸ることは出来ませんでした。応援団や選手団の気合、試合中のパフォーマンス?！はダントツ1位だったと思います。後は練習あるのみです。

医療技術部 臨床工学科 福田淑子

## 新光 毅先生 キワニスクラブの社会公益賞受賞

### 神戸の新光さんら受賞

—キワニスクラブの社会公益賞—

社会奉仕団体「神戸キワニ新光毅さん(神戸市東区、安田光安会長)は奉仕、スタン友好協会代表の西垣活動で社会に貢献したと、敬子さん(67)・宝塚市武庫区、第二十七回社会公益賞(川町)に贈った。  
を、伊丹市の調理専門学校「クック」は伊丹市内のイアールパーク(田一人暮らしの六十五歳以上中紀子代表)、「神戸難病」を対象に毎月十四日間、「相談室」医療相談担当医の一日当たり約百食の弁当を提

12.5Y

2002年12月5日読売新聞より

長年難病に取組んでこられて社会公益賞を受賞本当におめでとうございます。これからも健康に留意され益々のご活躍をお祈り致します。

新光毅さんは患者団体が運営している神戸難病相談室(神戸市中央区)で十一年間、患者の相談に応じてきた。西垣さんは一九九四年に協会を設立して現地への援助を続け、昨年五月、内戦で負傷した少女に義足を提供した。